

Title	ブレヒトの三つのヨハナ劇(二)
Author(s)	八木, 浩
Citation	大阪外国語大学学報. 39 p.179-p.194
Issue Date	1977-03-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80667
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ブレヒトの三つのヨハナ劇 (二)

八 木 浩

Drei Johanna-Stücke von B. Brecht (2)

Hiroshi YAGI

Hier in der letzten Hälfte der Abhandlung werden in drei Kapiteln folgende Probleme weiter behandelt und danach zum Schluß werden drei Johanna-Stücke sowohl von der Seite der Form als auch des Inhaltes verglichen.

4. „Der Brotladen“ als Vorform ; Fabel und Idee der „heiligen Johanna der Schlachthöfe.“ 5. „Simone“ von Lion Feuchtwanger und Entstehungsgeschichte, Fabel, Form und Idee der „Gesichte der Simone Machard“. 6. „Der Prozeß der Jeanne D’Arc zu Rouen 1431“ von Anna Seghers und dessen Bearbeitung B. Brechts.

Das erste Stück hat eine Parabel-Form, die eine Art Parodie ist, das zweite hat auch eine Parabel-Form, die doch auf der Phantasie begründet ist. Das dritte ist dagegen ein historisches. Diese drei Stücke beweisen die lebendige Vielfältigkeit seiner Dramen.

ブレヒトの『屠殺場の聖ヨハナ』は、救世軍の出現とその中心人物になる女士官という点で、1929年8月上演の『ハッピー・エンド』、1929、1930年の遺稿『パン屋』にていて、としばしば指摘されてきた。また、了解、認識のドラマという点では、1929年、1930年ごろの一連の教育劇や『母』と共通でもあった。『ハッピー・エンド』は、岩淵氏の研究によるのだが、^{*1} エクゾチックなシカゴを舞台に、救世軍を扱っている点で、次作『屠殺場の聖ヨハナ』の原型、あるいは『三文オペラ』と『屠殺場の聖ヨハナ』の中間的作品だともいえる。しかし救世軍入りをしたギャング団が時代の波に乗って銀行設立に乗り出すという『三文オペラ』に近いあらずじに比べると、『パン屋』はヨハナにもっと近い筋をはこぶ主人公、クヴェック夫人やワシントンを登場させている。さらに『パン屋』は、五十嵐氏の指適のとおり、階級闘争用の教育劇でもある。^{*2} それゆえベルリーナー・アンサンブルはこの作品を叙事詩的、異化的方法理解の鍵にしようとして改作・上演したのであった（1968年、ブレヒト生誕70周年）。ここでは1930年の恐慌に襲われた失業者たちが、パン屋を襲うこととなったいきさつが、プロローグや合唱つきで展開される。^{*3} この草稿はエリーザベト・ハウプトマン、エーミール・ブリなどの協力をえて着手され、しばしば完成予告が *Versuche* に出されていたが、ついに完成しなかったものである。こうして『ハッピー・エンド』から『パン屋』をへて、『屠殺場の聖ヨハナ』へと進んでいった創作過程が想像されうるのである。ともかく名作は、それだけにたいへんな生誕の苦しみと曲折をとまなうものであったことが推測されよう。ここにおいても、『三文オペラ』から『マハゴニー』、『ハッピー・エンド』への道と、かずかずの教育劇から『ファッツァー』、『ぱん屋』への道とが、（『母』におけると同じく）総合されて大作となったのである。この作品や『母』のなかには、『三文オペラ』や『マハゴニー』のたのしさの要素が大巾に減少しているが、それらの作品で成立した叙事詩的作品の性格はここで不動のものとなっていく。直接教育劇創作期に続いて書かれただけに、教化への重点が大きくなったが、マルクス主義の方法で資本と資本主義社会の構造を劇的に展開することに成功した点が新しい。マルクス主義はもはや理論的に、ドグマのように討論されるのではなく、行動する人物の内的、必然的要因と化し、劇的事件をつくり出している。ただしこれらの個人が未だ抽象的で、機構のなかの人格化された典型であり、血肉に乏しい点、これらの世界像が現実の世界像というよりはマルクス主義的なモデルである点は、すでにのべた通りである。

この作品は全体が13場からなりたっている。それはキリストの十字架への道を示す留(Station)にていて。そして第2場では、ヨハナの深みへおちていく第1歩、第4場では第2歩、第9場では第3歩となっており、第13場が屠殺場の聖ヨハナの死と聖徒列叙である。このように13の場面は曲折を描きながら、第1場から第3場へ(第1歩)、第4場から第8場へ(第2歩)、第9場から第12場へ(第3歩)、さらに第13場で終末へというように進んでいる。この第1歩の意味は、ヨハナが労働者らに神への信仰による救済を訴えたにかかわらず、なんの効果もなく、一体何がかれらの不幸の原因なのかを探究しようとするところにあるのであろう。高みは神への信

仰だが、深み（Tiefe）はちまたの現実である。その現実へおりようと決意したことが第1歩なのである。第4場の第2歩は、現実すなわち貧困をみて、それがかれらの性悪のためでなく、貧困にさらされているためであることを知るところにある。そこで彼女はかれらを貧困にさらしている資本家たちと対決しようと試みたのであるが、すべて挫折する。第9場の第3歩は、こうして資本家のおなさけの金をもらうことによってではなく、かれらに対抗することによって、かれらを考えなおさせようとする。具体的にはコミュニストらとともにストライキするのである。しかしこの深みへの第3歩は失敗に終り、彼女の裏切りという結果になってしまう。彼女がそれにきづいた時は、もうすでにおそかった。彼女の必死の抵抗もむなしく、利用され、聖徒に列せられてしまう。このような曲折に富んだフェーベルをもう少しわしくみてみよう。

近代資本主義の象徴のようなアメリカのシカゴの製肉王ピーアモント・モラーは、ニューヨークの友人から、南部関税壁徹廃不能につき市場の悪化が明らかだから、肉屋から手をひくようにとのしらせをうける。そこで血なまぐさい仕事がいやになったとの口実もたくみに、仲間の缶詰製造業者クライドルに店をゆずる。

覚えているかい、クライドル、2・3日前の事だった —
おれたち2人で屠殺場を、通りかかった晩のこと —
まだ新しい屠殺機の そばまでよって行っただろ
覚えているかい、クライドル、ブロンド色の大牛が
空を見上げてのっそりと 立ってるところに一撃を
くらってたろ、あの時にゃ、自分がやられた気になった。
ああクライドル、おれたちの 商売ときたら血なまぐさい。＊4

さらに訴えるシニカルなブランクバースの切々たるモラーのせりふと安値で持ち株をゆずるという提案に、缶詰製造業者クライドルは乗ってしまうが、競走相手のレノックスがたおされてからにしようとの条件をつけるのを忘れない。7万のレノックス大缶詰工場労働者は賃上げ斗争中に、自分たちの工場の破産を知る。街頭の新聞売りは、製肉王の慈善家ピーアポント・モラー、世界最大のデラックス病院、モラー病院の開院式に列席、と叫んでいる。救世軍の兵士たち、黒麦わら帽隊は、失業者増大に対して、薄いスープ、敬虔なうた、教化の説教でのぞむ。かれらのうた、“Obacht, gebt Obacht” は『ハッピー・エンド』に出ているものと同じである。とくに熱心なのは中尉ヨハナ・ダークだ。彼女は労働者らに、飲食のように低級な享楽に執着せず、より高いものへの感覚をもて、そうしないと天国ではなく、カオスしか与えられない、と説く。しかし彼女が不幸は雨のようにやってくると説くと、それは会社がつくるのだという労働者がいる。きみたちにはより高いものがわからないから貧しいのだと説くと、そいつはハイ・カラーだよと答える労働者がいる。かれらには労働の場がある。それを求めて走りさる。そこへ

クライドルの工場も閉鎖されたとのニュース。そこでヨハナは誰にその責任があるかを知ろうとする。彼女はモーラーが競争相手たちと闘い、そのため失業者ができたことを知る。そこで彼女はモーラーを訪ねる決意をする。同僚たちは、地上のいさかいにかかわりあってはならぬと叫ぶが、ヨハナは「わたしは知りたい」という。第3場では敗れたレノックスとクライドルを前に、モーラーは契約履行を迫る。だが市場は悪化していて、もし工場を買えば破産しかねない。クライドルをおそったこのような危機の描写は、資本主義に固有の危機の循環として示されている。資本主義社会の生産と消費の無計画的なアンバランス、烈しい競争、弱い業者の設落が、ここにわかりやすく示された。そこへヨハナが現れ、モーラーを識別する、例のシラーのパロディーの場がくるが、その時彼女が、「どうしてわたしだってことがわかった」というモーラーの問いに、「血まみれの顔をしているから」と答えるところがおもしろい。ヨハナの、なぜ屠殺場を閉めたのかとの問いに、モーラーは哲学者ぶって：「牛には大いに同情するが、人間のほうは性悪だ。/あんたの計画にふさわしいほど、人間はよくなっちゃいない。/世界を変えるよりまえに、/人間のほうが変らなくちゃ」などと答える。^{※5} モーラーは相場師スリフトに、ヨハナを深みへつれてゆき、屠殺場を観察し、貧乏人が貧困の責を自ら負うべきであることを示させる。ヨハナはヨハナで、モーラーの良心をめざませるのに成功したと思う。第一歩はこうして、それぞれ誤算をするところで終わっている。ここまでの3つのシーンが、実にスピーディーに、また因果も鮮かに展開されるところはすざましい。

この部分につづく深みへの第2歩ともいうべき4～8場は、たいへん錯綜した、悪戦苦闘のジレンマである。屠殺場でヨハナは、めしにありつくために、かまにおちて死亡した夫のことを追究するのをあきらめる夫人を見る。そのほか、「カル・マルクスが資本論の第1巻23章で『資本蓄積の一般的法則』についてのべた個所のぞっとするような図説がつづく。^{※6}」一方では富の蓄積が、他方では無知、悲惨、残忍の集積が極端になっていく。このどん底の貧困 (Pauperismus) を見せられたヨハナはいうのである：

あなたが見せてくださったのは、貧乏人の悪いところじゃなくってよ、
貧乏人の貧しさよ、
貧しい人の悪いところをわたしに見せるつもりなら
あたしはみせてあげられるわ、貧しい人のくるしみを。
貧しい人が墮落してる？ そんな話はまちがいよ！
あの人たちの悲惨な顔を見れば ちがってるってことがわかるでしょう！^{※4}

こうして彼女はここに貧者の悪ではなく、貧者の貧しさを読み、深みへの第2歩を進める。第5場。取引所は恐慌におそわれている。缶詰業者は肉を投げだし、倉庫はいっぱいであるが、バイヤーは買わない。ヨハナは隊員と取引所に押し入り、秩序を復せ、と要求し、かれらを愚か者

だ、さばきの日にすべてが明らかになるぞ、労働者が賃金をもらえないと、肉が売れぬではないか、と叱る。貧民たちを見せると、モーラーは気絶する。そしてすぐ意識をとりもどし、今度はすべての肉を買う、という。市場は救われ、屠殺場が開かれるだろう。こうしてモーラーを回心させ、貧者らを助けた、とヨハナは満足だが、実はモーラーはニューヨークの友人が肉を買うようにすすめてきた手紙を持っていたのである。これは第6場のテーマの通り、気まぐれのように、また計算ずくめでもあった。宗教的社会主義に対する徹底した資本主義的投機でもあるこの動機は、くりかえしあらわれる。次の第7場ではこの2つが癒着している。黒麦わら帽隊のスナイダーは業者に説いていう：「その連中はあなたがたから工場をとりあげてこういうでしょうよ、ボルシェヴィキのように行動して、だれもが働き食べられるように、工場を自分たちの手に入れよう」とね。なぜなら、こういううわさがもうひろがっていますからね、『不幸というものは雨のように自然に起こるのではなく、その不幸をたねにして利益を得ようとする者によってひき起されるのだ』とね。しかしわれわれ救世軍ならあの連中にこういつてやります。『不幸は雨のようにやってくるもので、どこからくるものであるかはだれにもわかりはしません。あなたがたは苦しみをうけているが、その報酬はきっとあります』とね」^{*4} ところで、ヨハナの成功に大きな印象をうけた家畜業者らは、ヨハナにたのみ、モーラーを動かそうとする。かれらはそれとひきかえにとどこおって払えない救世軍の家賃を払うという。ところがあいかわらず屠殺場は開かれていない。それを知ったヨハナは缶詰業者をおい出してしまう。これもイエスのパロディーである。その結果彼女は隊長から追い出され、第8場では、モーラーに寄付を求める。去りぎわに隊長スナイダーは「巨大な組織の中で雇用者と被雇用者が対立しているんだ／戦闘中の敵同志だ、およそ和解はできないものだ。／その間をかけまわって、なかだちしようというのかね。／けっきょくだれの役にも立たず破滅してしまうんだよ。」^{*4} といったが、第8場ではまさにそのとおりである。缶詰業者はモーラーから高値で牛を買い、低値で協定した肉を売らねばならず、労働者はしめ出されたままである。モーラーの援助金をヨハナはうけとるわけにいかない。だがモーラーは資本主義と宗教の不可欠性について賛える。

こうして第9場、深みへの第3の歩みがくる。ヨハナは隊員が「主イエスのもとは暴力はありません。平和があるのです」などと説いているのにであっても、もはや理解できない。ヨハナはこれらの資本主義の犯罪に対して企てを持つ人々はいないかとたずね、コミュニストがそれであることを知る。町の大企業がしめ出された全労働者の連帯ストを計画している。2人の労働運動リーダーが彼女にクライドル工場の労働者への重要な手紙をあずける。ヨハナは新聞記者らの誘惑をはねのけ、この世のしくみはシーソーのようで、「小数の上の人は／下の人が永久に下にすわり、上にあがってこないようにしておきたいとのぞむわけです』と語り、^{*4} 貧者の貧困が富める人のわざであるのを知る。そこへ、あすは再び仕事がある、とうとうモーラーが家畜を出したから、とのうわさが流れてくる。ヨハナはあずかった手紙をかくしている。彼女はストライキの暴力に反対であった上、今や秩序がもどってくるのだから、手紙をもっておこうと思う。そ

こへ、手錠をかけられてひかれていくリーダーたち。彼女は混乱してこういつている：「この泥沼を清らかにし、どん底の人たちのところに／近づこうと、一段一段深みにおりて行きました。三日のあいだ下へ下へと／呼びかけをつづけながら、しだいしだいに衰弱してゆき、／三日目にはとうとう泥沼の底にのみこまれてしまったのです、／寒すぎるわといいながら。」^{*4} 彼女は通りすぎる労働者から、連絡不完全のためストライキが敗北したことを聞き、罪の意識に追われてこう叫ぶのである：「ああ真実が、明るい光がほしい！／このひどい時代には吹雪で何もかもまっくら！」^{*4}」9場は細分された10ケの小景をめまぐるしく転回させて、ヨハナにおける第3の歩み、いわば認識の転機を扱う。つぎの第10場は、第9場でも示された投機の変化をとりあげる。モーラーは9場の6で肉の値をせりあげつづけ、9場の8でかれに代ってスリフトがとどまるところをしらぬ投機で製肉業を破滅させてしまうが、10場ではどん底からモーラーが立ちあがる。かれは缶詰工場を一つにまとめ、カルテルを結成する。かれは家畜の3分1を焼き、値を再び安定させる。賃金もさがり、労働者の3分1が首になり、ゼネストは弾圧される。平静と秩序がもどり、モーラーはヨハナに使いを送り、彼女こそ貧者の平安に必要なだと考える。かれは寄進して、悔いあらためる。しかし11場で、ヨハナは例の手紙を渡そうと屠殺場へいそぐ。彼女はリーダーたちの逮捕を見、手紙がわたらなかったからゼネストが挫折したのだ、との対話を聞き、くずおれてしまう。第12場では労働者たちが犠牲になった女性闘士を探している。しかしそれはヨハナではない。ヨハナは雪の中にみすてられている。

最後の第13場は、この力作の中のとくに力強い個所であり、その雄弁な言葉の技法を再現することはきわめて困難である。モーラーは彼女を黒麦わら帽隊の酒場へはこぼせる。ここで彼女は、資本主義と救世軍の支配者らによって、温健な殉教聖女として祝福される。かれらの言葉と、それにいどむヨハナの言葉は、助けること、変えること、上と下、闘志、迷い、すべて似ていて実は全くちがっている。支配者はゲーテや古めかしい言葉を莊重につくろう。「世界は変革を必要としています。……世を去っていくときまでに、世界の方がいまとはちがった／善なる世界になっているように、心がけるべきです」「上と下には、二つのちがった言葉があり、二つのちがった尺度があります」「搾取と無秩序のあのしくみ、／非人間的で、でたらめな／あのしくみはとほうもないものなんです」神や精神に救いを求める者らは「道路にたたきつけばよいのです」「暴力が支配しているところでは、暴力だけが助けになる。／人間がいるところでは、人間だけが救いなのです」といいつづけるさいごの言葉は、ことごとく賛美者たちの大きな声と合唱にうちけされ、失業と恐慌のニュース、抗議の叫びとまじりあいながら、屠殺場の聖ヨハナの死と聖徒列叙が完了する。この烈しいシーンは支配者の声を解剖して示す新鮮さでわたしたちに迫ってくるものがある。かれらの声は第10場中心に展開されている資本主義危機における独占強化に発する声である。この仕組みは、シューマッハー指摘の通り、レーニンの『帝国主義論』をふまえてかかれている。^{*6} 1900年以後カルテルは経済の基礎をなし、独占資本の競争が強まる。1929年ごろからドイツでの資本集中とカルテル形成の危機が強まった。ブレヒトはよくその状況

を分析して作品の基礎にすえ、たえず情報をつかんでむつかしい計算を貫徹した資本家たちを照らし出すのに、貧困・不正の謎解きに倦まぬ戦闘的宗教者の生涯をもってしたのであった。とくにそのことによって、うその信仰とは一線を画した社会的な宗教家がマルクス主義の闘士と遂に一つになりうる地点を示した点もみのがしがたい作品の魅力と新鮮さであった。挫折と罪と死をこえて、ヨハナは革命家にと成熟しえたのであった。^{*7} ブレヒトのモーラー像の二面性も忘れがたい長所であった。利潤と高尚への欲求、本心と作為の表裏一体、弾圧と感傷などなど、ペンティラやゼッアンの善人にとひきつがれる人物像がここに成立したのである。

5

それから10年たって、1940年、アメリカのブレヒトは再びヨハナ（ジャンヌ・ダーク）を素材にとりあげる。『アルバイツ・ジュルナル』の1940年7月7日によると、^{*8} 2つの戯曲のプランがたてられる。広い意味ではその2つともがジャンヌ・ダーク風である。1つはある盲目の乞食が戦争と一大強国の没落を予見し、友人にどう生きのびるかアドバイスする話。もう1つは、兄が戦争にひっぱられているあいだ、ガソリンスタンドで働いているオルレアン処女の寝てもさめても夢をみ、その夢でジャンヌ・ダークになり、その運命を辿る話。ドイツ軍はオルレアンに進撃中だ。彼女が聞く声は蹄鉄工や農夫がしゃべる民衆の声である。彼女はこの声に従い、フランスを外敵から救うが、内敵に破れるのである。このメモがおそらくスタートとなり、1943年に新しいジャンヌ・ダーク劇『シモーヌ・マシャールの幻覚』ができあがった。この作品はリオン・フォイヒトヴァンガーの協力によるとしるされている。フォイヒトヴァンガーは若きブレヒトの協力者であり、『夜鳴る太鼓』『エドゥワード二世の生涯』などと縁が深かったが、^{*9} 1944年にブレヒトのこの作と類似の小説『シモーヌ』を出版した。2人は同じ素材をめぐる協力的あい、1人は演劇を、1人は小説を仕上げたわけである。

フォイヒトヴァンガーは1933年南フランスに亡命、反ファシズム斗争に専念し、1936年にはブレヒトやブレーデルと『ダス・ヴォルト』を刊行した。しかし1940年にはフランス政府に抑留された。ブレヒトは6月28日にうれいにみちてしるしている^{*8}：「先頃南仏のFの秘書から一通の手紙がとどく。5週間も前に出されたものだった。Fが捕虜収容所に入れられたことを伝えている。Fはこの7月で56才になる。新聞によると、この手紙が届いた時にはドイツ軍はリオンに進撃中であつた。休戦協定には、フランスはドイツが要求するすべてのドイツ人を引き渡さねばならないという条項が含まれている」ブレヒトの心配はさらに8月19日にもしるされているが、8月27日フォイヒトヴァンガーがリスボンに着いたとのニュースで大喜び。「ここ何週間というもの、一日としてかれのことが頭からはなれなかった」としるしている。1941年にフォイヒトヴァンガーはさまざまな困難をのりこえ、ブレヒトたちのアメリカにやってきた。同年の日記では2人がヒットラー、戦争と生産力、歴史と文学などを論じたこと、マルクーゼやH・マンを交え

て戦況を活したことがうかがえる。とくに12月19日、20日の項はジャンヌ劇にふれ、『ジャンヌ・ダルク、1940』（12月17日）とか、『声』とか題し、声とは民の声で、ジャンヌが代表する、全9景中4景は夢で、反自然主義の様式になるが、その様式がすべてではない；二国間戦争では被支配階級と支配階級がそれぞれ共通の利害をもつ、などのことがしるされている。20日にはいよいよ第一場に着手。ジャンヌは読書中である。フランスの危機が負傷兵に語られる。亭主はガソリンに封印しろと命ずるが、従業員が反対しているなど。「この劇には身振りのないものがあまりに少なく、まだ全然芝居とはいえないし、中味がなく、死んでおり、矛盾律を持たない葛藤しかない。だからこの戯曲は当分書けそうもない」フォイヒトヴァンガーとの種々の会談記録は何回も続くが、1942年10月30日には、2人で『声』のプランを練るとあり、作品名が『ヴィトリの聖ヨハナ』ともなっている：「夢の中で伝説の人物と現実の人物がかさなり、ジャンヌは戦争の本質を見ぬくにいたる」記録によるとこうしてこの日から2人の協力が始まるのだ、ともいいえよう。11月25日には2人が規則的に仕事しつづけているとあり、テーマは『シモーヌ・マシャールグイジョーネンの幻覚』となる。^{*10} 「声」と「幻覚」こそはジャンヌの裁判の二つの焦点を形成していたものであったが、今や「声」から「幻覚」にとテーマが動いている。フォイヒトヴァンガーは作品の自然主義的な信憑性を防衛し、ブレヒトはかれの古い生物学的な心理学を拒否した。また階級対立の書き方について、亭主の石油隠しとシモーヌの放火の筋書きについて、2人の意見の対立がみられたが、放火の不自然さについて12才の少女が放火することなどで2人の意見の一致をみた。1943年の1月5日には、問題点を一言でいえば、映画の手續から脱し、異化効果と叙事性を深めるにある、とされる。ブレヒトが書き、フォイヒトヴァンガーが直す。ブレヒトはフォイヒトヴァンガーの構合力、繊細な言葉、劇的着想に感心しているが、異化効果や叙事詩的演劇になると、フォイヒトヴァンガーの理解がえられない。5月28日にこの作品を作曲したアイスラーは、このドラマの主人公をあまりに自然すぎる、といい、またもっと暗く、自由フランスの理念抜きで書くとよいのに、とのべているが、ブレヒトにはフォイヒトヴァンガーの自然主義が自分の叙事性ととともに、抜きがたい両極であったのだろう。終場については、2つの案があったが、シモーヌが直接ドイツ軍に罷免裁判されるよりは、罷免した亭主を憎んで個人的動機から放火したとされて火刑を免れる、ということにし、最後の幻覚の結果を高めたい、などとするされている。こうしてこの作品は1943年春に完成した。^{*11} フォイヒトヴァンガーは自分なりに小説『シモーヌ』を前述の通り1944年ストックホルムで出版した。(Neuer Verlag) かれはブレヒトとの協力について、目下入手できないが、Zur Entstehungsgeschichte des Stücks Simone と題した報告とブレヒトのメモが、1956・57年・No.9の Schauspiel 誌 (Frankfurt) に発表されている。また Neue Deutsche Literatur, 1957, Heft 6 にも、かれの問題は、註解なしでわかるような寓話的状況の創造、言葉の純粹さ、身振りや状況の真実らしさだった、などと注目すべき追憶がしるされている。これらの資料にもとづいて、（とくにフォイヒトヴァンガー側からの考察が不足しているが、これは他日に期して、）今かれの『シモーヌ』の紹介をしておく^{*12} マジノラインがくず

れ、仏軍はみじめな逃亡者の群になり、難民たちとともにごったがえしているが、サン・マルタンのヴィラ・モンルボは例外的な平和の島となっている。金持の運送業者プロスパー・プランシャールと支配欲の強い母と孤児でその姪であるシモーヌがそこに住んでいる。シモーヌは貧しい人の味方として死んだ父とジャンヌ・ダークを限りなく敬愛し、プロスパーからもらった男もののズボンをはいている。ジャンヌもそうだった、それに今日の難局は昔さながらではないか、自分も行動に立ちあがりたい、おちがもうけばかり気にして、ベンジンを独軍に渡すのを許せようか、それを敵の面前で破壊しよう、ペタン元師に祖国の永遠の理念をみせてやろう、と彼女は独軍進撃直前にベンジンに点火し、全車輛を焼きはらう。彼女の行為がのろしとなり、仏軍をはげます。友人らが救おうとするが彼女はとどまる。おじがこれを政治的犯行でないとして自分の店を救おうとすると、いったんそれに署名するが、その夜すぐそれを悔い、ジャンヌのようにそれを取り消し、一同の前で真の動機を告白して、悲しむ人々からわかれを告げ、おそろしい精神病院につれられていく。このファーベルとブレヒトの作品のファーベルは、大きな輪郭からみるとほとんど同じであり、とくにシモーヌとジャンヌ・ダーク、現実と夢の移行の点で同一の根底に立っている。

『シモーヌ・マシャールの幻覚』は、1940年6月、パリから南へ向う国道沿いの中部フランスの小さな町サン・マルタンの旅館オー・ルレの中庭で演ぜられる。全4部で、Ⅰ. 本、Ⅱ. 誓約、Ⅲ. 火事、Ⅳ. 法廷という形式になっており、各部は現実のできごとのほかに、シモーヌ・マシャールの第1の夢、第2の夢、第3の夢、第4の夢をそれぞれ含んでいる。

Ⅰ. 少女シモーヌ・マシャールはやとい主旅館兼運送業者アンリ・スーポーにジャンヌ・ダークのことをかいた本をもらってよみふけている。独軍戦車はロワール河に押し寄せ、仏軍は崩壊している。亭主は下僕らに愛国心をひきおこさねば、と考えるが、それもけっしてフランスのためでなく、ファシストの地主旦那のぶどう酒を安全な南仏へはこばせようとしているのである。町長が避難民輸送のためにトラックと石油をさし抑えようすると、亭主は反対する。従業員モーリス、ロベール、負傷兵のジョルジュ、おやじのペール・ギュスタフらは、この非合法石油を町長にあばくことができない。シモーヌもだまっている。しかしせりふは一つ一つ、階級性を鋭く示している：「旦那の酒は避難民より大事さ」とギュスタフがいうと、ジョルジュは「あいつがファシストだってことは世界中が御存知さ」というし、ロベールは「モーリスはえらくむくれてるぜ。あのろくでもない酒だるを女子どもの波にもまれながら輸送するなんてまっぴらだといってるよ。おれはもうねるぜ」という。食糧の調達に疲れはてて、戦争なんてくそくらえだという軍曹。ブレヒトの生き生きした対話はヨーロッパの戦場の中の民衆を上から下へとよくとらえている。その夜。ガレージの上に、金色で無表情な天使が、小さな太鼓をもって、ハンス・アイスラーの音楽にあわせて出現し、「ジャンヌ、神が祖国を救うようになんじを選んだのだ」という。天使は実は前線の兄であり、彼女はかれの職業を守って代行しているのである。ひるまのできごとと人物が交錯する。シモーヌはジャンヌ、町長はカル7世、とりまくフランス人のなかで

カル7世は戴冠され、フランス統一の任務にめざめる。美しい夢幻ではなく、半ばパロディーで、歴史が異化され、叙事化されている。とくにユーモラスなちぐはぐ、非条理すれすれの語、むにゃむにゃというような夢の言葉、ひるまの亭主へのあてこすりなどが、この場を楽しいシーンにしている。

Ⅱ．翌朝、前線の深刻な状況を耳に、亭主は逃亡をはかる。使用人を使ってトラックに瀬戸物や銀器や食料品を積みこませる。シモーヌは夢から勇気を得て、町長に亭主の計画を知らせる。町長に多くの避難民が同行し、トラックを出せ、と問答する。大量の物資輸送のことを耳にして、かれらの興奮がますます高まる。その騒しい状況の中へ、亭主の母が介入、略奪に肩すかしを与えて、シモーヌに食糧倉庫の鍵を渡し、トラックを難民に提供する。食糧が分配され、亭主もシモーヌの力で衝突が避けられたと喜ぶ。しかしシモーヌは瞬間の英雄だった。自動車が難民をのせて出してしまうと、シモーヌはマダム・スーポーに解雇され、倉庫の鍵をとりあげられる。美事な手法はこの母の性格づくりであって、同じ支配者階級の中でもこの母は、言葉少なく巧みに描きだされた傑作に属している。彼女が続く第2の夢で王母イザボーになって現れるに至って、劇は緊張を増す。この夜シモーヌは王により貴族に列せられるが、王母イザボーに排斥され、勝利の剣を刀礼後に返してもらえず、パリ進撃のための兵士も与えられない。王とイザボーは結びついて、敵の力是一向におとろえをしらない。天使にこれを訴えると、天使は彼女をはげまし、自分の場をすてず、闘いをつづけよという。戦車のキャタピラの音の中で、ヘクサメターの厳重な言葉で、占領者が町へくるなら、かれらに役立ちうるすべてをこわせという。アクチュアルな歴史の中の民衆的な声がきこえてくるようである。

Ⅲ．翌日独軍が進攻。独軍の太尉はマダム・スーポーとファシストのぶどう業者に暖かく迎えられる、ごちそうにありつくが、積み残しの難民は約束の食糧をもらえない。そこで町長にシモーヌは、不法な石油庫のことを想起させるが、逆に慎重にせよ、といましめられる。かれはうちひしがれ、占領軍の前に出る。類は類をもって集る、との格言が、金持は金持と集る、という形でくりかえされる。シモーヌはここで白昼夢を見る。カル7世の町長、ブルゴーニュ公の旦那、ドイツ軍太尉、イザボーのマダムがトランプしている。王はジャンヌの危機を予感するが、みんなに安心させられて坐ってしまう。ねむりからさめたシモーヌは、従業員らに石油放火に手を借せというが成功しない。かれらが独兵と反戦の言葉を交換しているまに、シモーヌは石油庫にゆき、マダムが独軍に石油提供の話を持ち出している時に放火する。爆発音がしてみんなが驚く。夜、亭主がロベールやモーリスとかえってくる。シモーヌは亭主に、自分が放火したことをかくさない。モーリスはシモーヌを隠そうとするが、シモーヌは反対する。亭主は不本意ながら、シモーヌが独軍が敵対行為厳罰のビラをはったのちに放火したといいはるので、やむをえず彼女をドイツ軍に手渡し、自分の店を守る。

Ⅳ．第3部はこれまでとちがい、現実→夢→現実と進んだが、第4部は夢→現実と進んでいく。さいごは現実でなくてはならない。第4の夢でシモーヌは中世風でしかもナチスのハーケンクロイツをつけた兵士らにとりまかれている。彼女は意外にも、フランス人ばかりのぶどう山の旦那

（ブルゴーニュ公）、亭主（元帥）、町長（カル7世）の三宗教裁判官により、「あらゆるフランス人を一つにするため」死刑に処せられる。これは民衆拔きのフランスの法廷であり、（しかも外国の支配者の便宜のために代行される法廷であり）仇敵ブルゴーニュ公と徒党を組んだマダムが検事である。犯行の動機は問題にされない。それをかくす方がかれらに有利だからであろう。シモーヌがひきあいに出す天使が悪魔にすぎない、というのもそれは下からきたのであり、いやしい兵士アンドレ・マシャールににているからだ、と裁くあたりが、ブレヒトのひらめく現代性である。スポー夫人：「まったく居酒屋の天使だわ。裏町のガブリエルね。……」旦那：「ジャンヌ、神はどこにいると思う？ 上か下か。そしておまえの天使はどっからやってきたんだい？ 下からだろう」という調子である。^{*4} シモーヌはガレージの屋根をみるが、いつもとちがって空虚である。翌朝フランスは武器をすてた。シモーヌは逃げようとしたがむなしく、聖ウルスラ精薄児収容所に投げこまれる。『コミュニーンの日日』の状況と同じで、外敵と自国の支配者に抑圧され、弱々しい町長や亭主も、反感に満ちた従業員も、この宿命を回避できない。彼女がひかれていく前に、天使がもう一度ガレージの屋根に現われる：

フランスの娘よ、おそれるな
おまえにはむかうものは皆やがてほろびる。
おまえに暴力をふるった手は
やがては なえるだろう。
おまえを売った因果応報の報いをうける。
おまえのあるところ そこがフランスだ。
そしていくばくもなく
フランスの栄光はふたたびよみがえるだろう。^{*4}

彼女がひいてゆかれると、二度目に空が赤くもえあがる。シモーヌの範例が本当の愛国者らに理解されたのである。

6

さらに10年たって1953年に、ブレヒトは3つめのヨハナ劇『ルーアンのジャンヌ・ダルク裁判1431年』をつくりあげた。これはアンナ・ゼーガースの同名の作品（ラジオドラマ）の改作である。ゼーガースは裁判の記録にさかのぼり、1937年に完成してアントワープのフラマン語ラジオ放送でこれを初演した。またこの作品は、同年モスコのインテルナチオナーレ・リテラツールに印刷発表されている。戦後はレクラム文庫から出版されたが、^{*13} そのさい、ゼーガースは資料を付し、また1928年の無声映画（La Passion de Jeanne D'Arc, Carl Theodor Dreyer 演出）の

写真をかかげた。ゼーガースはこの映画から大きな刺激をうけたからである。

この作品は1431年2月21日の市場の場面から始まる。この日は記録では予備審理の公開開始の日にあたる。ジャンヌがひかれてくる。それを見る民衆の言葉が、何人にもにつづけさまにのべられるように、役を定めずに並べられている。この日から5月30日まで100日のあいだのことが、ゼーガースの場合、場の切れ目、そのさいの時日設定が不明確で、ほとんど連続的につづいているかのように、なめらかに進行していく感がある。ドラマとしては、資料にたよりすぎて平板な忠実さに終わったきらいがあり、また他方、ドラマとしての時間や空間や人物の多面な造形に欠けている、といえる欠陥がある。しかし彼女の文体には、1937年のヨーロッパのアクチュアルな問題がはりつめており、たとえばジャンヌの次のような言葉によくあらわれている：「きっと勝利を得るでしょう。イギリス人どもは、フランスの土地を最後の一片まで失うでしょう。イギリス人はひとりたりともフランスにとどまってはいられなくなります」「イギリス人たちは、馬もろともすぐさま立ち去れ。一刻の余裕も許さない。わたしはかれらに向って叫んだ、すぐその場で撤収せよ、肌着のままで、はだかのいのちだけを持ち去るがよいと」「ただわたしにわかっているのは連中がみんなフランスから追い払われなければならないということです。この国で生命をなくした者以外はみんな。」^{※14} ナチスと闘うゼーガースは、1937年には、第2回国際作家会議に参加、バルセロナ、ヴァレンシア、マドリッドなどにゆき、『第7の十字架』の始めを『ダス・ヴォルト』などにのせていた。この作品の終りの方で、まきに火をつける人たちの後悔と悩みは、ナチスドイツにとりまかれたドイツ人のくるしみの声のようにひびく：「おれをぶちのめしてくれ」「おれはたいまつをもった。まきに火をつけたのだ。おれを殺してくれ」「おれは彼女を焼き殺したのだ」

ブレヒトはしかしこの作品を戦後にとりあげ、新しい理念と方向をこの作品に与えようとした。最後の場面で娘たちやルグランはこう歌うのである：

娘たち：……戦え フランス人たちよ

フランスの土をとりかえせ 汝らの耕すその土を。

ルグラン：この歌を今じゃ分裂したふたつのフランスで

歌っているよ。あっち側でもこっち側でも^{※4}

たしかにここには荒廃した戦後のヨーロッパに贈るブレヒトのねがいがこめられている。そして東西分裂と冷戦が当時どんな危機にあったかを考えるなら、ここにドイツの現状を憂えはげます声をききとることもできよう。ブレヒトはブルゴーニュとシャルル（カル7世）とに二分されたフランスを例に、ドイツの分裂を寓意したのである。そしてこの作品は1954年、ケーテ・ライヒェル主演でベルリーナー・アンサンブルにより上演され、また1961年にはペーター・パリッチがウルムで上演している。ブレヒトは改作にあたって、一見忠実なアダプテーションを行ったの

みのようだが、細部をよくみるとかなり綿密な改作がおこなわれていることがわかる。全体の構想からみても16場の明確な説明要約付きの叙事詩的ドラマになったし、当時の民衆の希望を代弁するものとして、ピサンの詩句を借り、プロローグ、エピローグのみならず、第7場などの要所に配した。裁判中心の単調・平板さを多彩にするように、さまざまな階級をあらわす人物たちの登場する街頭や田舎のシーンを占綴して、それを見事に描き切って、ジャンヌ劇を民衆劇にし、いわば民衆を主人公にした。こうして始めてジャンヌ・ダルクが時代の中の全体像としてとらえられることとなった。民衆が次第にフランスの自由と統一という課題を自覚し、ジャンヌの犠牲をみて、行動に立ちあがる発展のカーブが躍動的にとらえられた。こうして裁判の場は3、4、6、9、12、13、14、15場になり、3、4で進行し、6、9で取り消しが行われ、13、14で再度それが取り消されるというジグザグの進行が、叙事的にあらわれることとなった。またそれにかみあう大衆の場が、1、2、5、7、8、10、11、16にみられ、1と16は同時に全体のわくをなし、個人と大衆がよくかみあって動くように配慮されたのである。小説家ゼーガースの忘れやすかった叙事詩的演劇の手法がつらぬかれ、ゼーガースの求めた劇性が叙事化されて、すぐれた改作ができあがったのである。

第1場は1430年秋で、第2場よりも3ヶ月以上昔。ジャンヌ・ダークが1430年5月にコンピエーヌの闘いでブルゴーニュ派にとらえられ、11月にイギリス軍にゆずりわたされ、ルーアンに連行された、というおそろしいニュースが伝えられる。それはフランスの未占領区トウレーヌのある村である。国土の3分2を占領しているイギリス征服者たちに抵抗する絶望的な試み、80年にわたって荒れ狂う戦争、その中で娘たちがぶどうをしばりつつ、ジャンヌ・ダークを賛えていたときのことである。彼女たちはうたう：

それでも今はもうこの乙女のもとで戦う者がたくさんいる、
まるで踊りに出かけるように戦場におもむくものが。
敵どもはロアールの河をふりおとした。
そしてフランスの太陽が新たに輝き出るのだ。^{*4}

このゼーガースの原作にないシーンで、ブレヒトは合唱に代るうたを用いて、叙事的にさかのぼり、民衆の中のジャンヌを明確にし、フランスの風土を出してその行方を明示した。

第2場から第5場まで、裁判記録の予備審理（1月9日－3月25日）の中の公開審理（第3場、2月21日－3月1日）と牢内審問（第4場、3月10日－3月25日）をとりあげて中心におき、その前後（第2場、第5場）に民衆を登場させている。^{*15} 第2場は1431年2月21日ルーアンの広場。イギリスの貴族たちとかれらに身を売ったフランスの高位聖職者たちが、抵抗運動の闘士たちを裁判に連行していくのを、群衆が見守っている。その多くはブレヒトがつくったもので、ぶどう商やデュフル博士のような金持・インテリから、農民、ルグラン、魚屋のおかみなどへと

巾広い民衆を出し、イデオロギーと階級が鮮明である。何が民衆の敵かがみんなの論題である。続く第3、4場の審理の場はゼーガースにほぼ忠実である。王宮の礼拝堂で宗教裁判が始まり、ジャンヌは異端の烙印を押そうとする聖職者たちの尋問をたくみにのがれる。フランスの裁き手たちはむしろ気味わがり、ジャンヌは予言の声を強めて、フランスの勝利を説く。さらに司教は牢獄にジャンヌを訪問し、質問を続ける。そこでブレヒトが挿入したラ・ロッシュェルのカトリーンの話は面白く、また意義深い。単にこのえせ予言者が競争者なのでなく、英国と妥協する日和見勢力の人形であることが示される。そして第5場ルーアンの毎週立つ市場がつづく。これもブレヒトの挿入で、人々の反英気分がおもしろく出され、4人の聖職者が下品な話をして通るのを、廃兵や魚屋のおかみがからかう。魚屋のおかみのうたはブレヒトのモチーフである：「ボーヴェのコション司教は／いまはえげれすのお人じゃ。そりゃよくわかる。／身も魂も捧げつけて／5000ポンドもいただいたから。」^{※4}

第6場～第10場は1431年5月9日から5月24日までのころ。記録によると、3月26日から5月24日まで普通審理がつづく。70箇条の論告文、12ヶ条の告発文、ジャンヌに対する勧告・訓戒などをへて、第一回判決があり、ジャンヌ改宗の誓い、改宗後の判決にいたる多くの資料がある。第6場5月9日は、「真実を告白せぬ場合は拷問にかけける旨を告げ、すでに櫓の中に準備した拷問の用具を示した」ジャンヌが「靈魂を肉体からもぎとろうとも今まで以外の答はできぬ」といい、裁判所が拷問適用無効になるのをおそれてこれを延期したことなど、すべて資料に忠実である。^{※15} 第6場は大体ゼーガースに沿うてつくられているが、牢獄にきこえるダンス曲を出す。第7場はゼーガースを逆転している。そこにブレヒトはコションの司教を諷刺する例の歌を出し、また次の場のモチーフへのつながりをつくり出した。第8場はブレヒト作。ジャンヌは先の場で思い違いし、民衆から忘れられたと考える。しかし実は広場や酒場で民衆が彼女を理解し始める。ここでこれまで以上に生き生きと顔と個性のある大衆が顔を出し、ジャンヌが英兵につぎつけた宣言が出まわり、酒場では英兵がおっぱらわれたりする。しかしジャンヌは外との連絡にも失敗し、第9場で火刑に処すと脅迫され、人々にみすてられたという感情にうちひしがれ、自説と消しに署名する。ブレヒトは、ゼーガースが民衆を直接出しているのに比べて、舞台の内と外に分けて外から民衆の声を入れ、また外に火刑台をのぞかせた。第10場はもとはつづいていたのを切り離し、詳しくし、群衆の反応を示す。からかう英兵、しょげる民衆、笑うぶどう酒商。魚屋のおかみは、「連中はあの子にどんなことをしかけたんだろう…」と理解を示す。

第11場から第15場までは、5月24日のできごとののち、5月30日までをふくむ。資料によると、5月28日から30日にかけて、異端再犯の裁判が行われた。5月28日女の服を脱いで男の服を着たジャンヌは、再び否認して火刑台に登る。しかしブレヒトはここで、多くの手を加え、資料になかったことを補った。資料は支配者の手によってほろぼされ、客観のよそおいあるものしかのこされていない。まずブレヒトは第11場のぶどう酒酒場をつくり、いつもの通りの上品な紳士の中立論を出す。英国には文化はない、しかし反英行為は有害だ、政治のことが民衆に、百姓女にわ

かるはずはない、とかれはいう。そういうかれは、困っている女に自分の部屋代を支払おうとしない。そこヘルグランがコルベット艦グロリアス号の攻城器陸あげを港湾労働者が拒否したとのニュースをもってくる。上品な紳士はこんな女らはみな殺しに、火あぶりにせよ、とナチスばりにしゃべり、娘になぐりつけられて逃げていく。第12場ではルーアンで英軍と民衆のなぐりあいがおこり、そのことを知ってか、ジャンヌが男装したとのニュースが入り、司教は仰天する。第13場では、およそゼーガースを尊重して牢獄でのジャンヌの否認の斗いが描かれる。しかしブレヒトはジャンヌにこういわせることを忘れない：「司教様、いつかその日がくるのです。トゥレーヌのぶどう山の百姓たちが、ノルマンディーの舟乗たちと団結して、もうあなたたちに何一つ提供しなくなる日が」と。第14場、第15場は5月30日。ジャンヌは死刑執行人の手にひきわたされ、ルーアンの広場のたいへんな群衆の面前でジャンヌは火あぶりにされる。ここでもブレヒトは、若い息子が支配階級をののしってとらえられそうになった瞬間、かれを機智でかばう民衆を出し、たのしませてくれる。ゼーガースの終りの場は感情移入が強いが、ブレヒトはそれを切り取って捨ててしまった。ブレヒトがこの場面に挿入した非資料的な多くの独創は、作家が資料とどう対決するかのよい答を与えてくれる。

さて最後の第16場はまったくブレヒトの創造物で、時は5年後。パリの住民の叛乱とともに決定的な解放とフランスの統一が始まった。この民族運動の先頭には小娘ジャンヌ・ダルクの伝説的な姿が、つねに先頭を切っていた。ルグランがその例であり、5年間闘いに出ていた。かれは帰ってきて、子どもたちにフランス人がひとり立ちを始めたと言ひ、みんなが喜びあふ。そしてみんなでジャンヌの死を想い出す。これもまたブレヒトの叙事詩的演劇である。ルグランがジャンヌの生涯をまとめて物語る。みじめな敗北を大勝利に変えたのが彼女だ。彼女が口を閉じてからもみんなに声がきこえたのだ。娘たちのうたがひびいてくる。*

刑吏がかの女を火刑台につきとばし、
炬火が音をたて、海からの風が高鳴ったとき、
フランスの娘はもっと大声で叫んだ。
戦え、フランス人たちよ、
フランスの土をとり返せ、汝らの耕すその土を。

以上3つの作品を辿ってきたが、次にこれらについて、比較考察をすすめる課題が残されている。『屠殺場の聖ヨハナ』はパロディー的なパラベルで、ジャンヌをまねつつきびしく批判した。『シモーヌ・マシャールの幻覚』は幻想的なパラベルで、幻覚を利用してジャンヌを今日に活かした。しかし双方とも、ジャンヌ・ダルク（ヨハナ）をそのものとして対象にせず、現実のできごと、すなわち恐慌やファシズムと並行関係にある批判尺度としての寓話にした点でにている。これに対して『ルーアンのジャンヌ・ダルク1430年』は歴史劇であって、ジャンヌ・

ダークかくありきに迫ろうとするものであった。このような多様な形式が今日の演劇に与える意義についてはしばしばふれたところである。そのほか、ハンス・マイアーのようにジャンヌをアウトサイダーとしてとらえたり、^{#16} 幻想劇を大きく現実からひきはなしてとらえたりするのではなく、歴史における女性像を革命の過程の中でとらえた試みとして、そういうブレヒトの多くの女性像の一つとして、3作品を追究する課題ものこされている。しかしもっとも重要な課題は、歴史の発展過程のなかで3つの作品がつくられたことを忘れず、1930年の状況とちがった今日における上演いかにあるべきかを追究したヴェークヴェルトの例にならい、^{#17}これらの3作品をアクトチュアルに考えなおすことであろう。

註

1. 岩淵達治：ブレヒト 1966 紀伊国屋新書 S.84-86
2. 岩淵・五十嵐：ブレヒトの戯曲 1972 河出書房新社 S. 421-431
3. B. Brecht: Der Brotladen. Stückfragment 1969 edition suhrkamp.
4. ブレヒト：屠殺場の聖ヨハンナ、シモーヌ・マシャルの幻覚、ルーアンのジャンヌ・ダルク裁判1431 1974 三修社（岩淵達治訳、以下これを用いる。）
5. Ernst Schumacher: Die dramatischen Versuche Bertolt Brechts 1918-1933. 1955 Rütten & Loening S 450
6. 上記5. S.466-468
7. Helmut Jendrek: Bertolt Brecht Drama der Veränderung 1969 August Bagel Verlag S.117
8. B. Brecht: Arbeitsjournal 1973 Suhrkamp
9. Erinnerungen an Brecht 1964 Reclam Lion Feuchtwanger の2つの追憶がみられる。
10. B. Brecht: Die Visionen der Simone Machard In: Schriften zum Theater 4. S. 169
11. この作の初演は1957年3月 Städtische Bühne Frankfurt am Main. そのご東西ドイツほかで広く上演された。
12. Der Romanführer III 1952 Hiersemann Stuttgart
Neue Deutsche Literatur, Heft 6, 1957 (Erinnerung Lion Feuchtwangers)
13. Anna Seghers: Der Prozess der Jeanne D'Arc zu Rouen 1431 Ein Hörspiel 1965 Reclam Leipzig
14. 上記 13 S. 42-43
15. 高山一彦篇訳：ジャンヌ・ダルク処刑裁判 1971 現代思潮社
16. Hans Mayer: Aussenseiter 1975 Suhrkamp
17. Manfred Wekwerth: Die Jeilige der Schlachthöfe (In: Brecht? Bericht. Erfahrung, Polemik) 1976 Carl Hanser Verlag.